

著者紹介 1993年、小学校低学年向けの「作文」「読書」「思考力」「野外
体験」を重視した学習教室「花まる学習会」を設立。「小学3年生まで育てたい算
数」ほか、著書多数。近年、公立学校への支援にも力を注いでいる。

11 問題意識の啓発

よりよい学校づくりのための塾からの提案⑪

花まる学習会代表 高濱正伸



◆ある新聞記事

二〇〇九年八月五日の新聞記事が、話題になった。全国学力テストの結果を、文科省の委託を受けたお茶の水女子大の教授が分析した結果ということだが、大見出しは「親の収入高いほど好成绩」。

横軸に左は「二〇〇万円未満」、右は「一五〇〇万円以上」という「親の年収」、縦軸が「テストの正答率」のグラフが載っているのだが、見事に右肩あがりになっている。

身もふたもない結果だが、けしからんと立腹したって、欺瞞でしかない。個別例外はいくらでもあるにしろ、平均すればそうなることなど、皆感じていた事実だ。今言いたいのは、その記事の終わりに載っていた、見逃せない文章のことである。

◆問題意識の触発

それは、「親が心がけていること」と

彼女の言い分はよく理解できる。全くもって私自身がそういう中学生だったからだ。そこで私は、彼女のために「問題意識ノート」というものをとらせた。仕組みは簡単。様々な新聞記事を切り抜いてきて、私は、文字にしてメディアに流すことが絶対にできないタブー面も含めて、本音で解説する。Aさんは、その私の意見を、まず要約する。そして次に、自分の意見をまとめて書く。それで一セットである。

このことを、いろいろな記事に対して行った。米軍基地問題、京都議定書、公害、官のリストラ……。すると、「えー、そういう意味だったんですか」と、活き活きとした反応を見せ始めた。

そして、ほんの二ヶ月くらいこのノート作りを一緒に続ける間に、社会科の成績も上がってきた。ちなみに、彼女は、私立トップの女子校に行き、国立大学の数学科で学び、「高校の先生になることが決定しました」と、先日挨拶に来た。芯のしつかりした魅力的な大人に育ったと思う。

ついでに言うと「先生に教わった『復習ノート』(先月号でお知らせした、「やりっぱなしにしないためのノート」)は、大学でもずっと続けましたし、高校でもほめら

「学力」の相関を見たところ、「読み聞かせ」や「ニュースや新聞について子どもと話をする」という心がけの親の子が、高学力だったという内容だった。またさらに「読み聞かせ」や「ニュースを話題にする」家は、親の所得に関係なく学力向上に一定の効果が見られたということであった。

「読み聞かせ」が定着した家庭の子が読書の好きな子になり国語が得意になり、全学力的に成績がよくなることは、調べなくても「そうだろうな」と誰でもうなずく結果であろう。問題は「ニュースや新聞について話す」とこと「学力」の相関である。

ここに、今の学校になくて、あれば教育上素晴らしいということのヒントがある。それは問題意識啓発の手立てということである。

学力育成において、大切な第一歩は「基礎力をしっかり身につけること」であるこ

れました」と教えてくれた。
◆大人の本音こそ、心を揺さぶる
さて冒頭の記事の小見出しとして、「新聞読んで学力向上も」となっていたのは、新聞社らしいご愛嬌だが、確かにこのようなアプローチが、子どもの問題意識を覚醒させ、学力を伸ばすのは、本音だと思ふ。

ただ一方で、ただ読ませているだけでも、そうそう向上しない。見方が分からないし、感じ方が分からない。大人が、本当に感じ思っているままに本音で語るからこそ、心を動かすのである。

「正解」を言おうと無理しなくていい。例えば当時言い切った「京都議定書」に関する私の意見も、その後知識人たちの本を読むことで、随分修正させられた。それはそれでいいのだ。要は子どもの問題意識をかきたてればいいのであり、そのためには、「大人のその時点での本音の意見」をぶつけることなのだ。

重要なことは、新聞の一記事は、自分の生活につながっているということ教えることである。無駄な天下りが多いことが、自分の父親の手取り給与が少なくなることに直結しているということを伝えることであり、ひとごとじゃない、どれも関心をも

たなきやいけないと分らせることである。本当に、見事にどんな記事だって、全て自分の生活に直結している。遠くの国の戦争だって、社会不適応の青年が起した犯罪事件だって、どれもこれもである。どれもこれも私に関係していると知ったとき、力強い問題意識への道が開かれる。

◆外部リソースの利用を
そういった授業を、学校でどう実現すればいいか。先生にはそう簡単に思想信条を言い切つてしまえない制約というものがあ。それは分かる。しかし、「外から来た社会人が本音で語る会」を授業で行うことは可能であろう。大学生でも良い。そういう外部リソースの利用は、もっともって学校が積極的にやってよい部分であろう。

生徒の保護者も含めて、外のいろいろな大人の人の「偏っているかもしれないが、その人の本音」をたくさん聞き影響を受けた総和として、自分の意見も形作るということが、あるべき姿と思うがいかがか。

今はメディアを通じた意見も制約の中にあり、先生も言えない部分もあり、子どもに伝わるのは「教えられる部分」として残った抜け殻のような情報になってしまっているのではないだろうか。

親の本音の拾い方

担任への不満